或る開発技術者の記録

中　島　章　子*

コロンボプランとは第二次世界大戦の後に最も早く発展途上国援助を目的として設立された国際組織である。1950年の英連邦外相会議によりスリランカのコロンボで会議が開催されたためこの名称になっている。日本は1954年に参加した。ちなみに日本の国連参加は1956年12月である。コロンボプランはアジア・太平洋地域の経済発展に技術援助を中心に促進する目的で設立された。南南協力の機関である。

日本の戦後経済が発展し、GATT（General Agreements on Trade and Tariff）貿易と関税に関する一般協定11条国へ移行し保護貿易から自由貿易へ移行するのは1963年である。また、IMF（International Monetary Fund）国際通貨基金14条国から８条国へ移行し外貨不足を理由に為替割り当てをすることを廃止し、自由な外貨への交換を保証し始めるのは1964年である。８条国へ移行してようやく国際的には先進と認められ、OECD（Organization for Economic Cooperation and Development, 経済開発協力機構）にも参加する。すなわちコロンボプランに参加した当初の日本は先進国ではなく南南協力の技術援助をしていたわけである。

海外技術協力事業団、OTCA（Overseas Technical Corporation Agency）は今

*福岡大学経済学部

の国際協力事業団の前身である。日本の海外援助は技術援助に始まった。それに専門家として勤務し始め、派遣されたのはフィリピン、東パキスタン（現在のバングラデシュ）である。国連西アジア経済社会委員会バグダッドからの招へいが氏に届くのはアフリカのガーナへの出発の２日前であった。ガーナへの出発の為の手筈はすべて整っていた。日本風の律儀な性格のために氏はバグダッド行を断り、ガーナに赴任した。以後、ガーナで肺癌を発症、49歳で他界した。フィリピンと東パキスタンの派遣から氏は多く執筆し、多くの記録を残す。『日本プラスチック新報』への寄稿がある。氏が残しているフィリピン、東パキスタン、アフリカ、アフリカの記録や自叙伝は長いのでこれらは一部を割愛し、その一端をのみ掲載しようと思う。

出向先の組織・仕組みと日本の霞が関しか向いていない JICA の間で多く専門家がどのような苦労をしたのかの記録等は多くの専門家の記録として残っている。

フィリピンでは労働の雇用者研修の指導に従事した。当時の雇用者研修所での資材の不足を嘆いている。薬品を注文したらそれが汚職に取り込まれた模様である。戦争の傷跡の残るフィリピンで日本人であるということだけで困難に直面したらしい。また、日本の軍票に投資してそれが交換されず無に帰したというフィリピン人との交流にも、発展への不信感を払しょくする困難が伺える。泥棒やインチキな外貨交換などにもめげず研修の仕事に従事していた。

東パキスタンでは手織機から機械織機を導入するにあたり中小企業省での指導に従事した。工業化を推進する目的で派遣されたのに、機械の導入どころか、輸送の手配やら、もっとも先にしなければならなかったであろう水道の設置を行っている。工業化を無のところから起こさねばならなかった1960年代の技術援助の実態が伺える。

East Pakistan Small Industries Corporation は東パキスタンの独立後は Bangladesh Small Industries Corporation になり、現在は Bangladesh Small and Cottage Industries Corporation になって存続している。Micro Credit の恩恵もあり、中小、零細企業を助ける組織となっている。雇用に占める影響も大きい。農村非農業の重要性は経済学的にも、技術的にも、産業としても、また雇用としても重要である。Common Facility Centers および Common Service Centers で従事した。

フィリピン、東パキスタン時代での記録からは予算編成の時期や周期の違いで援助活動に従事する最前線の専門家（Expert）と OTCA 本部職員の軋轢が見て取れる。昼間は現地で働き、夜自宅で OTCA, JICA に報告書をしたためる。報告書を書いても、書いても、OTCA は改善されない。

予算の例を挙げよう。日本は単年度で会計年度は４月から３月である。国連は２年毎の予算で会計年度は１月から12月である。６月から５月末という会計年度の国もある。とあるプロジェクトが２年予算を必要としていても２年目の予算がつくか否かが翌年にならなければ判らない。５月に何かの予算を執行したくても、それを日本の予算で使うには３月には決済できない。この会計年度の違いという単純な違いがもたらす障壁には国際機関で働いた人間は頭を悩ます。更には、援助では、現地では部品を購入したいのに、設備一式を購入しなければならなかったり、仕様が違って使えなかったりする。

西日本と東日本では電気の周波数が違う。昔は厳密には異なる周波数では機械は動かなかった。これと同じような問題が国際社会には多くある。電圧が異なる。単相と複相という送電の種類がある。さらには電圧が安定する、しないで変圧器に加えて電圧安定機まで必要になる。100ボルト単相に設計されている機器を220ボルトの複相電流で使用するのである。

部品一個納入するのに仕様が異なれば使えない。再注文したら会計年度を超えて購入できない。開発援助にともなう様々な現実の問題の実録を知って

いただきたい。

国際機関への援助が複数年度で予算計上出来るようになったのは Millennium Development Goals 2000年が初めてである。専門家が要求した雇用保険の適用が実現するには多くの年月がかかった。時間はかかったが、次第に改善の方向には進んでいる。

東パキスタンに着任するや否や、ナラヤンガンジーから船に乗りチャンドプールへ行き、蚊や南京虫にやられ、食事も水も無いなか、バリサールまでは行ったが引き返した。ガンジス河の偉容さには目を見張る。メグナ河の大きさ、恵みとともにその影響は大きい。５年を経た後にもガンジス河の偉容を理解しきれていないという記述があるがそうだろうと思う。

以後、各地の Common Facility Center と Common Service Center の運営、設置に従事することになる。繊維織物の指導に赴任した筈であったが、電気の敷設、水道の敷設、機械の搬送、機械の設置、屋根の設置からしなければならない。特にクマカリとショヴアランプールは水道の設置からしている。

全国にいくつかのセンターを設置するというのは、グラミーン銀行も採用している方法である。センター制ともいうような制度が1957年の中小企業省の設立以降に作られていたのかもしれない。

フィリピンで自分の注文がすり替えられた話と、東パキスタンの地方での設置の話を抜粋して記載する。古いが、援助の実際体験の記録を掲載することで国際援助の実態を知り、それを将来の国際援助に生かしていただきたい。

また、氏の記録を読んで思うことは、民間人を援助で活躍してもらう為に休職の制度を取り入れるとか、民間人を登用する制度を作って、より柔軟に対応できる多くの民間人を活用できる道を開くべきである。

いささか冗漫であるが、エッセーとして掲載させていただく。こういう世界に身を投じることになる、氏の側面をまずお知りおき、あるがままに記載出来て幸いである。なお、タイトルの「或る開発技術者の記録」の命名は永

江真夫名誉教授である。

フィリピン

　薬品の注文が汚職と絡んで、高価な薬品ばかり大量に届いた。ここで氏は述懐する。『私の前に関係したアメリカ人の技術者、織物実習室を設計した技術者は予算の都合とか、何かの事情があって、準備機械類、付属品、消耗品を同時に設置できなかったのかも知れない。後任の私はその事情を知らないままに、ここの設備は不完全で糸からの製織は不可能と言い、参画した技術者の知識が不足だったのかと非難している。……海外の技術協力、指導に携わると本人がやった業績、良いこと等は全て当然として受けられるだろう。むしろ彼のやった業績は、名誉欲に飢えた人にその業績を取られ、現地人の功績として言い伝えられるだろう。ミスがあった時、その間違えが本人のやったことでなく周囲の事情で生じた間違えであっても全て技術協力に携わった人の責任と言われるだろう。良いことは原地人、悪いことは後に残らない指導者の行ったことである。このことは海外での技術指導に携わる人の避け得ぬことである。』

　汚職は任期延長にも関係して、あまり援助の効果は上がらなかったであろうと推察される。

東パキスタン前期

　４日ぶりに事務所に出勤した私は、私の身辺の世話をする総務の担当官カリム氏に呼びつけられた。彼は、「ミスター、中島、あなたはチャンドプールに旅行されたそうだが、EPSIC の許可なしに旅をされて困ります。以後注意して下さい。」「この四日間は休日だったでしょう。休日は自由であるはず

です。休日に私のお金で旅行をするのは本人の自由でどこに行っても構わぬでしょう。どうして EPSIC の許可が要るのですか？」「ここは東パキスタンです。あなたの場合、たとえ休日でも旅行する場合は全て届出て許可を得なければなりません。」

「どうしてだ？この国では個人の自由は認められないのか？それよりも、私がチャンドプールに旅したことを君はどうして知っているのだ。私はEPSICの誰にも話していないので、君は知らないはずだが」

「チャンドプールの警察から連絡が来たので知りました。あなたは外人ですから、一人歩きの旅をされては困ります。警察へ届け出る必要があるのです。逐一そうしないと泊まるとこに不自由するでしょう。」

「……」

私は彼が私の行動を監視しているのに驚き、同時にこの国のややこしい規則を知った。これではまるで個人の自由は認められない。

EPSICの事務所は狭く、薄汚いものだった。通路には紙くずが散っている。階段にはチリが白く積っている。たばこの吸い殻が落ちている。そこを通る身分の低い人達はツバをベーッとはいて行き過ぎる。手で鼻をつまんで鼻をチーンと鳴らして出し、通路の隅に落として廊下に消える。事務官は靴を履き、ズボンを着けてはいるが、小使の一部はルンギーを着け裸足である。

事務室の中は机を雑多に並べ、色の黒いあごひげ、鼻ひげをつけた若い人達——つまり彼らが事務官なのだが——が書類を前にして難しそうな顔をしている。どちらかと言うと小柄な体格の人達、そして動作は鈍く、どう見てもどう見ても一所懸命に仕事をしているとは見えない。女の事務員、オフィスガールと言うのはない。

そこへ色の白い、比較的背の高い私が入ると、彼らはいっせいに手を止めて私を見るのだった。

私はその非衛生な事務所に慣れ、その雰囲気になれるのに骨が折れた。狭い事務所の中には、私の個室を作る余裕がない。私は片隅に、イスラム氏と仮の事務机を並べた。

彼らは私に東パのことを何かと話してくれる。どちらかと言うと小使の一部は私にこび入るようだった。

仕事に関して一片の書類が私に渡された。それは東パの七カ所に建設予定の Common Facility Center の計画書であった。二項で出来た簡単なものだった。それ以外の書類は見当たらなかった。

二週間後私はタンガイルに転出を要請された。そこでは宿舎は無料で準備する。食事も提供される。よって私はそこに長期滞在し、そのセンターを完成、機械の運転指導をしていただきたい、と言うのである。

私は荷物を纏めてジープで出発した。片道は二時間で行ける所である。

思えばこれが東パキスタンでの公用旅行の第一号である。その後このような旅を何十回したことだろうか。そしてこの門出に雨期特有の豪雨に遭遇し、計り知れない経験を得たのだった。

日のカンカン照りの道をジープは心良く走った。人気の少ない、行き交う車が二、三台という。緑に包まれた東パの道を走った。午後三時にはタンガイルのセンターに到着した。ところがマネージャーはダッカに出掛けて不在だという。留守番している係員は何もわからない。工場を見ようとしたが、鍵がなくてあけられない。宿舎はと聞くと何もないと言う。町にホテルがあるだろう、そこに泊まろうとすると、街にはホテルも旅館もないと言う。途方に暮れた私達は引き返すことにした。

途中まで帰った所でダッカから帰るマネージャーに会った。折角来たのだから、もう一度後戻りしてくれと言う。仕方がない後戻りしよう。

今まで晴れていた空がにわかに真っ暗になった。と思っている中にジャーッと雨になった。雨の激しいこと。ジープはヘッドライトを灯す。ところが五メートル光は雨のため見えない。運転不能。ジープは山の中で雨が上がるまでストップとなった。

雨の激しさは、日本で言う夕立の数倍の強さである。雨と言うよりバケツで水をぶっかけると言った方が分り易い。あるいは消防ポンプで水をぶっかけると言った方が適切か。誠にすさまじい雨である。

吹き込む雨を避けるために折りたたみ洋傘を取り出す。二分間ももたぬ中に雨が沁む。レインコートを身に着ける。一分間もたない。レインコートを通して雨が肌にさわる。天井のカンバスを通して雨が漏る。避ける方法がない。ジープの中にいて、私は十分とたたぬ中に雨が肌まで通っていることを感じた。靴も勿論びしょ濡れ。待てよ、鞄の中に雨が入って、書類をぬらさなければよいが……。

雨は一時間降り続いて小雨になった。ジープを動かしタンガイルの町にやっと入った。町の入口の小さな食堂——チャンドプールで見た食堂より少し立派だった——に入り休憩することにした。するとまた、激しい雨になった。全く激しい雨。

現地人は乾いたルンギーを取り出し、濡れたものを私の目の前で着替えていく。ルンギーはこんな時着替えるのに便利である。私にも着替えろという。ところが私はズボンにパンツを人前で着替えるわけにはいかない。「バスルームはないか？」「そんなものここにはありません。」「では着替え出来ない。」私はパンツまでずぶ濡れで辛抱するのだった。

食堂に水がつき出した。道には水が二十センチメートル溜まっている。その水は見ている中に水嵩を増す。三十センチメートルになった。道から食堂に水が流れ込みだした。椅子の上に上る。これ以上増えたらどうするか……？雨はまだ土砂降りである。

この雨は私の門出の洗礼だったようだ。降り始めてから約二時間で、道路の上にこれだけ水がつくのを生まれて以来見たことはない。それがずんずん増えるのが目に見えるのである。それに対してここでは処置する方法はない。現地人は大声で歌を歌い、じーっと増える水を見ているだけだった。

私は、東パとは大変な所だと考えこんでいた。そして夜とともに濡れた服を通して寒さを感じ出していた。

午後十時、雨は上がり、水の引いた後を私はセンターにやっと到着した。マネージャーはセンター内の官僚、つまり自分の家に私を案内し、今晩はここに泊まるようにと言い、私は同意した。早速服を着替える。熱い風呂が欲しい。しかしここには無い。私はありたけの服を出して厚着する。それでも寒い。仕方がない。鞄から荷物を出して点検する。コンサイスの英和、大切な辞書。東パでは入手できない辞書。和英辞典がびしょ濡れになっている。

私はこの辞書を一頁ずつめくり、たんねんにタオルで水をふき取る仕事にとりかかった。

夕食は十二時に出来た。辛い、まずしいパキスタンカレーである。食欲のない私は、まずい外米だけをもらい、それに食塩をぶっかけてのどを通した。兎に角、辞書を使えるようにして、今夕は寝るのだ。あすはあすで又何が起こるだろう。

その夜、体温計は三十九度を示した。私は風邪にやられ、夢うつつだったようである。

翌日、熱っぽい体の私が見たのは、ガランとした工場に、カレンダー、スラッシャーサイジング、巻取機が組み立てられていて、天井の完成していない屋根から雨が滝のように流れて、それらの機械を濡らし、真赤にさびさせ

ているところだった。糸は見当たらなかった。工場には四十ワットの電球が一個だけついていた。係、事務員は机の番人をしていた。

私は熱っぽい体をベッドの上に横たえて、休息をとり、さてどうするかと考え込んでいた。

マネージャーも私と同様発熱し、参っていた。それでありながら彼は自分の小使共を叱り飛ばして、私の宿泊施設に力を入れていた。ダッカで聞かされた、タンガイルでは充分な宿泊施設が提供され、食事も充分に供給されるだろうというのは間違いだった。宿泊施設は未完成だった。彼は私にそれらを提供するために、自分のベッドを私に与え、家具を提供して事務所の片隅に宿泊所を作ろうとするのだった。シーツもない、毛布もない哀れなものだったが、彼の責任を果たそうとする熱意を知ることはできた。

このマネージャー——色の黒い、ちょびひげを生やし、ちょっと背丈のある純粋の東パ民族の顔をしたマネージャーが、Mr.Sarkerであった。東パキスタン繊維技術学校第一回卒業生で、後年私のよき助手となり、EPSICのCommon Facility Centerの建設に力をそそぎ、成長してその長となった人である。私の在任中にセンターは稼働に入ったが、それに彼は大きく貢献している。彼が私の助手として敏腕を振るわなかったら、私が東パで行ったことは成功しなかっただろう。

タンガイルに私は四日泊まった。その間にSarker氏は東パの手織事情、センターの生い立ち、建設の困難、事情、そしてEPSICの不満をこと細かに語ってくれた。

タンガイルは場末の町といった感じで、電気もやっと灯っているという状態で、水道は勿論ない。私が好適に住むような家もない。それに加えて、私はフィリピンでの体験——指導という任務を完成するためには、中央官僚の不備のために行い得ないことが多い。だから実を挙げるには中央にいる方がよい——も考え合わせて、EPSICの本部のあるダッカに引き上げるべきであ

ると結論した。

ダッカに帰った私はホテルグリーンに入り、報告書をタイプで書き上げた。六項にわたる報告は、タンガイルセンターの不備を率直に記している。

ホテルには絹織物の指導に派遣されているコロンボプラン専門家、橋本修三氏が止まっていた。ダッカから約三〇〇キロメートル離れた所にあるライシャヒから出張して来て、私と一緒にショバランプールのセンターに行くとのことだった。彼はパキスタンの経歴８年であり先輩にあたる。私達は初対面の挨拶を交しビールを抜いた。先輩は私に有意義な体験談を語ってくれた。

Mr. Quader を道案内とした私と橋本氏はナラヤンガンジーからポンポン蒸気――チャンドプールに旅した時と同じ形の粗末な発動機船――船に乗ってショバランプールに向かった。狭い河を下り、メグナの本流、川幅が十キロメートル以上あるだろう本流を下り、そして狭い河を再び遡ってショバランプールに着いた。行程六時間。その間の景色は人間臭さから全く離れた、日本ではとても想像できない佳境と言ったものだった。打ち続く広野原、ゆるく流れる水、目に見える河岸、そこには車なく、看板なく、灯はなく、人家はない佳境である。

ショバランプールは市の立つ商業地とされており、それ故にここに CFC が建設されたとなっていた。到着した私を脅かしたのは、その商業地は家数約一〇〇軒集まった河岸の村落で、水道なく、電気もない町だった。人々は石油ランプを灯し、泥で作ったかまどで飯をたくのである。映画、喫茶店、そんなもののある筈がない。先にチャンドプールで驚いた私は、ここに来て見てチャンドプールはやはり大都市だったと、つくづく感じたのである。

その町の対岸に土地を埋め立てて、EPSIC の Common Facility Center（日本ではこの程度の工事はいくらでもあるのだが）は建物の偉容を誇っていた。

隣近所には民家は何もない。私達はセンターに入り、休息した。

ここのベッドは木の台だった。マットはなかった。私は持参のシーツを敷き、持参の枕を置いた。持参のかやを取り出した。事務所から机を運ばさせ、橋本氏はそれを並べてベッド代りとした。石油ランプをたよりに、私達はからいパキスタンカレーを手づかみで食べた。

この貧しさ、この文化の遅れはどこから来るのだろう。そしてこんな所で技術指導できるだろうか。食事の後で庭に出て、澄んだ月を見ながら私は考えたりした。

翌日工場を見た私を驚かしたのは、ここにも屋根の完成せぬままに機械を組み立てていること、電気のないのに機械を組み立てて何の役に立つか、水道配管をしていて源の井戸のないこと、付近には手織業のないのに機械を組み立てて何ができるだろうか、事務員が英語を読めないのに公文書はすべて英語のこと、会計係が加算の計算のできぬこと、付近は泥棒が多くて危険なこと、機械は錆びだらけのこと、……全てが不備、不足、でたらめであることだった。

その夕、私は計画のずさんさに驚き、橋本氏は日本的に考えると馬鹿みたいだがここは東パキスタンだよと言い、私達はジン（この国では酒類の販売は極少である。酒屋に行ってもジンだけしか売ってない。そのジンを買うにもライセンスがいる。）を抜き、ガンジスの消毒の水で薄めて、月を見ながら胃に流し込んだ。

EPSIC の長官 Mr.Azizul HUQ は私にバリサール、シャハジャットプール及びクマカリの各センターを訪問しそれらに対してアドバイスすることを要請した。

この国ではホテル、旅館は非常に少ない。というよりないと言った方がよ

いだろう。だから旅行する時は一般に寝具を携帯する。私は長官の要請に応じて旅するために、かや、敷きぶとん、シーツ、枕を買い入れ、それをバッグに入れて旅装を整えた。同行の Quader 氏はあちこち調べて旅程を作り、必要な所に電報を打って旅行の準備をしていた。

私達はガンジス河をスチーマーで下り、バリサールに到着した。約二カ月前に私が無謀な旅をした所である。今回の私達は政府官史の宿泊所であるゲストハウスに泊まる事ができた。持参の寝具をならべ、前回に比して気持ちよく泊まることができた。

翌日センターを訪ねた私は、建物だけが半分完成し、その他は何もない工場建物を見学した。ここは薄暗いけれど電灯があるのがましだった。水道設備、工業に欠かすことのできないそれは未完成だった。付近には手織業は見当たらなかった。この状態で任務とする繊維工業の指導を行うのは無理だった。

私達は町の付近を見学し、クルナ市に向けて発った。クルナに一泊し、そこから汽車でシャハジャットプールに行く予定である。

クルナは東パ第三の大都市である。人口三十万と言われ、五十万とも言われる。ここには勿論電気はあったし、ホテル……市で一番立派と称されるホテルでは水道が設備してあった。蚊を防ぐために寝る時には持参のかやを張った。

クルナから北上する汽車は見すぼらしい。私達は一等車に乗ったのだが、その汚いこと。コンパートになっている座席の上は埃で真っ白である。ドアの鍵は半分壊れている。扇風機……形状の古いものが二台あり、そのスイッチはたれ下がった電線を手で捻って接続するとぶるんーと音を立てて廻り出す。窓の外から手が伸びる。物乞いである。鍵をかけ忘れた扉が開いていて物乞いが車内に入ろうとする。Quader 氏がここに来てはいけないと叱る。汽車はのろいスピードで走る。日本のように着発の時間が守られているはずは

ない。

ウラパラ駅で下車した私達はバスで目的地のシャハジャットプールまで行った。バスは古い、古いおんぼろバスだった。三十年程前から使用されているだろうと思われるバスは、傾くたびに車体がギシギシ言って、今にも壊れるではなかろうかと心配された。途中の道が舗装されているのには感心させられた。

道端に建てられたセンターに到着した私は、手押しポンプ、この付近唯一の手押しポンプで水を汲み顔を洗った。水は鉄分の臭いのぷんぷんするあの東パ特有の水である。ダッカから飲み水として瓶に詰めて持参した水はとっくになくなっていた。私はその鉄分の多い水をのんだ。

他に水がなければ飲まざるを得ない。

宿舎の便所は未完成だった。私は野糞たれをした。電機は勿論ない。準備されたベッド——かんな削りをしていない板を釘で打ち付けた台。現地語でこれをチョキと言い、彼らの寝台である——に持参の敷ぶとんを敷き、シーツを敷いて、椅子とし、ベッドとした。

夜になった。石油ランプに虫が飛んで来る。蚊が刺す。私は足に食いつく蚊を叩くのに手を休める暇がない。蚊取り線香……それを売っているのはダッカに一店だけある。ここには付近一マイル内に店がないのだ。蚊取り線香など手に入るものか。

その夜は月はなかった。見渡すと、どこまでも続いている。右を向いても、左を見ても灯はない。闇だけがあった。後で分かったことは、ここから二十マイル——三十キロメートル以内には電灯はないことだった。

私はその夜南京虫にやられた。

翌日そのことをマネージャーに話すと、彼は、「ああ、そうか」と言っただけだった。この国の地方では、南京虫がいるのが普通である。

寝ながら記憶をよみがえらせた。カルカッタに到着した時、道路でごろ寝している人々に私は驚かされた。今考えると、そこにごろ寝している人々を見たと言うことは、それを見るための電灯、街路灯があったと言うことである。翌日はダッカの町のみじめさに接し、カルカッタは大都だと思った。チャンドプールで得た体験は、ダッカにはホテルもある、ビールも何とか手に入るということだった。タンガイルはチャンドプールに比べると相当文化が遅れている。私はそこに嫌と感じた町だった。あのうらさびれたタンガイル……。ショバランプールはひどい所だった。そこの郵便局から電報を打つと、四日後にダッカに届くとのことだった。でもそこには、手押しポンプが壊れた河水を飲めば宣しいという安心感があった。そして今いるシャハジャットプール。……あるものは延々と続く闇だけ。

そういう中で私の任務は、私は疲れていて、うとうとしたらしい。

「ミスター、カデール。喉が渇いた。水を飲みたい。でも私にはあの手押しポンプの水は、チャンドプールの経験から口に合わない。ビールを手に入れると言っても無理なことはわかっている。喉を湿らすものを何か欲しい」

「ミスター中島、ココナットを手配します」

「頼む」

一時間後にココナット、日本で言う南国の椰子を小使がもってきた。その口を切り、私の腹一パイに飲む。喉の渇きはなおる。

「普段ならこのココナットは一個六パイサか八パイサです。所が今日は外人の中島がお金を出して注文したから、一個十二パイサとのことです。私は本当に一個が十二パイサとは思えません、十二パイサと八パイサとの差、四パイサは買いにやった小使がチップとして自分のポケットにしまいこんだと思います。悪いやつです。ですけど中島さん、これがこの国の風習なのです。

中島には難しいと思いますが仕方ないのです。払ってやってください。」Mr.Quader は丁寧に説明してくれた。私は初めて乗ったベビータクシーの運転手を思い出していた。

センターの工場は完成していた。周囲は三キロメートルの間に小売店は一軒もない、辺ぴなこのいなかに、80×120 の床はコンクリートでできた完成してガランとしていた。マネージャー Mr.Ahmad は大きな机前に座っていた。職長はその横で何事が起こるかと目をきょろきょろさせていた。隣には小使が控えていた。加算のできない会計係と、書かれたことだけを清書するタイピストが隣の部屋にいた。

「ミスター、ナカジマ、私は繊維技術者で繊維のことはあなたよりも詳しく知っているかもしれません。だからマネージャーになったのです。このセンターの建設を開発したのは一九六〇年である。一九六三年まで三年間に本社からここを訪ねてくれたのはあなたが二人目である。ここにはいろんな事情があって、付近の住民は EPSIC never succeed Common Facility Center と言っている。住民の言うことをほんとだと思っている。東パの官僚も含めて、EPSIC の本社は私達を全く振り向かず、彼らは自分のふところをあっためる賄賂の道のみ目をつけて動いているから、このセンターはだれも振り向きません。だから私も、EPSIC never succeed Common Facility Center と思っています。」

「それであなたはここで何をしていますか？」

「本社から命令があったことをしています。」

「工場を見るか？　機材は？」

工場の中はガランと空いていた。工場の裏に回った私は、野天に放りだされている梱包したままの機械をみた。その機械は日本から輸出されたものが大部分である。野天に放り出していたら、この焼けつくような暑さと、タン

ガイルで経験した激しい雨によって、掴包した機械でも錆びる、いや腐ってしまうに違いない。タンガイル、ショバランプールで見た赤錆だらけのカレンダー、巻取機……。

「カデール君。機械を野原においていたら錆びるね。」

「そうです」カデール君は私の話す英語をうまくキャッチする。

「マネージャーさん。いい天気で暑いね。今工場の後を見てきたけど全く暑いね……。」

「ボーイ。うちわであおげ」私はタオルで汗をぬぐう。

「機械は水分を扱って、この暑さにやられたら錆びるということを君は知っているかね？」

「機械は錆びたらだめです」

「ではどうして機械を雨ざらしの野原に放りぱっなしにして、工場の中はがらんとしておくのかね。どうして機械の荷物を工場の中に運び込まないのかね？」

「そういうことはパキスタンでは行いません。パキスタンでは、まず床を作り、機械を据付けて、試運転を行い、それから、屋根を作るのです。それが常識です。」

「待てよ。……。そういう方法をどこで習った？」

「西パキスタンです。西パには一年中雨が降りませんので」

「そうか。所でアーメッドさん。私はあなたに機械の諸梱包を雨から守るために今すぐ工場の中に運び込むようアドバイスします。直ぐやりなさい。」

「私は EPSIC のマネージャーです。今ここで野原にある機械をガランとした工場の中に運び込めと言われても、EPSIC の本社の指令のない限りできません。」

「どうして出来ないかね。あなた自身、機械を運び込んだ方がよいと思う

かね、運び込まなくてもよいと思うかね？」

「運び込まなくてはならぬと思います」

「ではどうして運び込まぬのだ」

「私は EPSIC の官吏です。本社の指令のない限り物ひとつ動かすことができません」

日本の官庁の組織もそうである。大会社の組織もそうである。自分はこうあらねばならぬと知っていながら、上からの命令がなくては動かれない。

「君は繊維技術者だったね？」

「はい、東パキスタン繊維技術学校第三回の卒業生でして、機械のこともよく知っています。」

「そうか、第三回卒業生か、君のような立派な人間が EPSIC にいるとは知らなかった。所で巻取機を知っているか？」

「知っています。巻取機は……」

「その巻取機が錆びたらどうなる。雨期だから雨は降る。湿度、温度ともに高い。機械は野天に放り出してあるのだが」

「それは錆びても……」

「だまれ、その巻取機が錆びたら何もできなくなることを君は知らなければならない。機械の荷物を全部工場内に運び込むのだ」

「私は本社の許可なしには動かすことができません。直ぐ手紙を送って許可を取ります」

「君ができないのなら私がやる。機械を動かすために人夫がいる。すぐ雇ってくれ。

カデール君、本社の許可がいると言っているが、本社は許可するだろう」

「イエスです」

旅程を二日延して、私は現地人とともに野天から工場内へ梱包を移動する仕事を終了した。ここには、クレーンとか、リフトのある筈がない。私達に

あった道具は三本の鉄棒と、太い綱が一本だった。竹をころに用いて一個２トンに及ぶ大小の箱を二十数個雨のかからないところに運び込んだ。

作業の中で、彼ら人夫が汗水流して一生懸命に働くのを私は認めた。南洋の人々は労働意欲がないと日本では先入観を持たされていたが。

クマカリに着いた時は、陽はとっぷり暮れていた。私は石油ラムプに照らされた通路に汽車から飛び降りた。（ここの下り線にはプラットフォームがない。だから乗客は皆飛び降りるのだ）私とカデールは石油ランプの道案内の後を歩いて宿舎に入った。

数日の旅の経験で私は宿舎の汚いベッドには驚かないようになっていた。便所は完成していた。からいパキスタンカレーに懲りた私は、飯の上に塩をふり掛け、生卵をぶっかけて食事とした。これは五日間毎食つづいた。夜南京虫にやられなかったのは幸であった。

翌朝早くからカタン、コトン、カタン、コトンという付近の騒音に私は目を覚まされた。それは宿舎の隣の手織業者の手織機による製織の音であった。十二、三才から二十才台に至る若者達が、右手でシャットルに連る綱を引き、左で才サ打を行い、左右の足で踏木を踏む全身動作のかなり激しい連続労働である。彼らは日の出とともに作業にかかり、夜は石油ランプを灯して、九時、十時まで労働している。又その横では、九才から十二才の男の子達が手廻しの糸繰機で糸巻きを行い、ヨコ糸巻きを行っている。私は興味をもって手織業者の裏の家をこっそり見に行った。するとそこの裏庭では女、子供が整経を一生懸命に行っているではないか。

東パの内陸にあるクマカリは、日中は気温が三十五度—三十八度に達する。夜になって三十—三十二度である。暑い、暑い、とても暑い、汗がじっとりしている。その暑さの中で彼らは素裸かになって、流れる汗を拭こうともせず一心不乱に手織の重労働を続ける。喉が渇くと水を飲む、飲み終わるとす

ぐ仕事にとりかかる。

南洋の人はのんびりしていて勤労意欲に欠けるという俗説はここでは通用しない。この労働を通常の日本人が行ったら、暑さのせいもあって数時間続かないだろう。彼らはそれを日の出からとっぷり日の落ちるまで、しかも十四、五才の子供がやっているのだった。電気もない所で。

又パキスタンでは、女は働かないとされているが、ここではそうではない、彼女らは表面に出ていないだけである。裏で働いている。

このクマカリも文明の灯とは凡そ縁遠いものであった。日本より遅れること数十年と私は推定した。私はその夜宿泊所の前の池に写る月を眺め、池の向う側にともる石油ランプの灯を見ながら感ずることが多かった。

ここのセンターの建物は明り取り窓を除いて完成していた。機械は雨のかからぬ所に整頓保存されていた。従業員はまじめに掃除その他に従事していた。マネージャーは私に不明な点をどんどん質問した。

ここには小型発電機が到着していたが、輸送途中にバッテリー、セルモーター、燃料パイプ等が盗まれて役に立たなかった。センターの機械はすべて電気がなくては動かない。

「マネージャー、どうして盗まれた部品を購入して発電気を運転できるようにしないのか？」

「そのことは数回本社に申出ております。所が本社からは一向に処置してくれません。申出てから一年になりますが、何ひとつ返答がありません。そして私達は本社の指令なしに動くことはできません。

EPSIC の本所は地方のことはかえり見ず、彼らは自分のポケットマネーを得ることばかり考えております。私はここに在職して二年になりますが、その間にこのセンターに進歩らしいものはありません。この状態ではこのセン

ターは多分完成しないでしょう。見込みがありませんので私は辞めようと思ってます。」

「チョウドリさん、ポケットマネーを得ることばかり考えていて仕事をしないと言うのはどう言うことかね」

「この国では賄賂は政界、官庁につきものです。自分の地位を通じて、ポケットマネーを手に入れるのです。これは EPSIC だけではなく、どの官庁もそうです。」

「そうかね……それでこのセンターの完成する見込みのないと言うのは？」

「中島さんは来パして間がないから分からぬのでしょう。この国の人は働かない、特に上役はだめ、私達を見向いてもくれないのです。だから発電機の部品も一年前に申し出たのに何の返事もないのです。」

「そうか、有りがとうマネージャー。大分パキスタンの様子が分かりました」

私とカデールは二泊してダッカに向った。再び汚い汽車に乗り、ゴアランドからスチーマーに乗り換えて、一路ナラヤンガンジーに向った。夜行の船は気持よかった。附近はなるほど文明の灯から数十年遅れているが、船上をそよぐ風は昔も今も変わらない。

私は船頭の光に照らされる夜のガンジス河を十時間にわたって下って行った。

いろんな思い、今回の旅行の体験が頭をかすめた。

EPSIC の本社に出勤した私は長官に呼ばれた。

「地方の旅行御苦労様。所で君の意見を聞きたい。この国へ来る日本人は沢山いる。所が君のように地方を旅し、その苦しみを知る人間はいない。旅

では色々苦労しただろう。ここは東パキスタンであって、日本でもアメリカでもない。いろんな思いがけないことにぶつかったと思う。よく辛抱してくれた」

「はい長官……」

「君は君自身で東パを見て来た。東パは日本人の君には決して住みよい所ではない。君が、ここで一生懸命任務を遂行するか、否かは君の自由だ。コロンボ計画の規定によると君は私達のゲスト（お客様）である。私達は君を束縛できない。君に命令はできない。ただし君の生活に関しては、及び仕事上の困難に関しては EPSIC が責任を持つ。それでも君は仕事をするのは自由だよ。しなくて遊んでいても君は給料をもらえる。」

「わかりました長官。いずれ意見を提出します」

私は多忙になった。ホテルグリーンの、薄暗い灯の下で綜合報告（出張報告）の原稿書きを夜の一時、二時まで行った。報告をまとめるということは、自分の知識ですべてを調べ上げることである。そうするとそもそもこの CFC の計画、特に設置機械選定計画の不備が、全面的な計画不備が目に付く。現地にマッチしない不適当なものであるのに加えて、その所在さえ不明――台一千万円もする機械が所在不明になっている。それを管理するマネージャーはスポイルされているし、それを見る本社の技術陣は、朝お茶を飲んでだべり、十時に茶を飲んでだべり、十一時に茶を飲んで、処置の一つもしない。そしてこの国の国情は、日本のそれに比して決していいとは言えない。

私は報告づくりに疲れると庭に出てビールを傾けた。南京虫の生活……海外技術協力事業団を出発するときに、「仕事はさぼっても、体面をきずつけないように、遊んで来て下さい」……シャハジャットプールで見た遠々と続く闇……日本の私の妻子のこと、彼女らは電気の下で飯を喰っているだろうか、送った金は届いただろうか……ここには何がある。何もないまずいビー

ルだけがある。……仕事を続けようとすると、チャンドプールであったような発熱、げり、不衛生な生活に会うだろう……。日本に帰れば電気の下で何かの職にありつけるだろう……、実情にマッチしない欠陥だらけの CFC の無計画……その計画実施をやったとしたら、完成後に役に立たないセンターを見て、その見通しもできなかった中島だったと他人は決めつけるだろう……日本ではこういう計画はもう少しまともに……ナラヤンガンジのあの乞食達……計画の不備はあれと、これと、もうひとつ、あれもだめだ、……海外技術協力実業団の人達は、遊んで来いと言ったが、そうかコロンボ計画では遊んでいても給料をくれるのだな……シャハジャッドプールで汗を流して働いた男達よく動いたなー……EPSIC Never Succeed と言ったな……クマカリの子供達。汗水流したあの重労働……待てよ、あの年齢の子供だったら日本では小学校に行き、中学校に行って、親の下で可愛がられる年頃だな。貧しいために、クマカリの子供達は体をすり減らして賃金をかせいでいる。そうか、そうか……だが、プランニングの不充分なこのセンター計画に私が加担して完成して、現地人に何のメリットがある。—機械選定不備のこのセンターは完成しても三文の得もないぞ……どうするか……世の中はなるようにしかならないのだが……ひとつの企画を完成することにより、それより直接間接に得る利益があるはずだが、……クマカリ、シャハジャッドプール、ショバランプール、いずれも電気がなかったな。センターの完成という目的で発電機を動かし、電灯を灯すとするか—そうすれば彼らは電気というものを初めて知るはず……同じ年令の子供でありながら、日本では親に「疲れたでしょうケーキでも食べなさい」と言われて辞書を取る手を辞めてケーキに手を出す、あるいは本は面白くないと言ってテレビのスイッチを入れる子供達。それが日本の通常の生活のはずだ。ここでは石油ランプの下で手織して明日の食事費をかせぐ九才の子供、十四才の子供……何とかしなくては……そうか、フィリピンで岩崎専門家が Going my way と言ったな。Going my way だ。

「Mr. Chairman 私は私の報告を提出しましたが、ここの官庁の組織では私の報告が長官のところに回るまでには時間がかかると思いましたので、ここにコピーを持参しました。読んでいただきたく思います。」

ちらっと目を通した長官は

「君は Common Facility Center 計画はだめだと書いてあるね。本当にだめか？」

「将来商業ベースで経営可能とされたこのセンター計画は商業ベースに乗るとはおもいません。ですから商業ベースを目的とするなら中止した方がよいと思います。」

「中島さん。この計画は商業ベースに乗るということだったし、私も信じていた。だから、私たちは出発した。それを今日だめだと言われても私は信用できない。」

「あなたが私の言うことが信用できないと言っても私の目で見て完成しても商業ベースには乗らぬと思います。」

「ボーイ、紅茶をくれ」

「ハイ」

パキスタン茶が出され、くつろいだ気持になる。

「誰がこの計画を作ったのでしょう？　その人の名を知りたいと思います。無計画な企画に乗ったこの Common Facility Center の完成は、商業ベースに乗らないものとして完成するか、又は中止すべきだと思います。」

「この計画は商業ベースに乗るということで政府の許可を得ている。それを商業ベースに乗らないからという理由で取り下げることはできない。なんとかしてくれ」

「設置する場所の選定が良くない。機械の選定は不充分だ。計画を立て直さなければならぬと思います。それに進行状態もよくない。」

「この計画作製時には私は EPSIC にいなかった。だから当時の事情は私には分らない。と言って長官という地位をもらった私は、前任者が行ったことだからと言って責任を逃れるわけには行かないのだ。長官という地位はそのようなものなのだ。ミスター中島、君の力で何とかセンターを完成し私を助けてくれ」

「分かりました。勿論完成に私は努力します。だが、計画を立て直さなくてはならないでしょう。」

「この東パキスタンの条件は日本と違って非常に悪い。仕事はやり難いと思う。困ったことがあったら直接私に言ってくれ」

「……」

紅茶をすすった二人は親密の度を増した。

「ところで日本にはハラキリと言うのがある。中島はハラキリができるか？」

「ハラキリって何だ？　どうしようもなく分らないが」

長官は机の上のペーパーナイフを取り、ハラキリはこう言う風にするのだと言って、腹にナイフを突きさすジェスチャーをして見せた。

「ハラキリ、ハァハァ、ハ、ハラキリとは切腹のことか、切腹をね。私にはハラキリとは切腹のことか、切腹をね。私にはハラキリの気持は分からないが」心の中では長官はハラキリをどこで勉強したのかと驚いていた。

「私達は、日本人は責任に失敗したらハラキリすると理解している。中島もそういう人間の一人と理解するが」

「そうですか。そうですか。いいでしょう。その代わりに私が困ったことを直接あなたに申し出て、あなたが充分なことをしてくれなかったらあなたはハラキリしますか？」

と私は冗談まじりに言いながら長官の持っているナイフを借りて、「ハラキリ、ハラキリ」と言いながら、自分の腹の上にあてて見せた。

その夜私は Common Facility Center に対する解決の道を見出すのに苦しんだ。長官の熱意はよく分る。だがこの国でそれを完成して役に立つだろうか。それよりも、東パの人達の怠惰性から考えて、彼らにそれを完成するだけの意思があるだろうかと考え悩んだ。貧困、経済、文化の低いこと、人をだましても何とも思わぬ国民性、完成することに意義があるだろうか。

待てよ、このセンターを完成するということに名を借りて仕事を進めると、町ができて以来四〇〇年になっても電気を見たことないクマカリの人々は電灯の灯りが見える筈だぞ。ショバランプールもそうだぞ。そして、……あの真黒になって汗水流して働いている子供達も電灯の下で人生を喜ぶ権利がある筈だぞ。

「ミスター中島。Service Facility Center の実行計画があるので、君のアドバイスを欲しい。スルタンに言ってあるから早急に検討してくれ」

長官に要請された私は直ぐにスルタン氏の所に行きその計画を検討した。

「どうしてこんな役立たずの計画を作った。このような施設を作っても東パには役立たない。全面的に変更した方が宜いですよ」

「どういうことですか中島さん。そしてどのように変更した方が宜しいですか。」

「このような試験機を備えた綿業試験室を各地に作っても猫に小判だ。それだけの予算があるなら CFC の補充完備に使用しなさい。少なくとも CFC と併設しなさい」

「CFC と SFC を併設すると言っても、私たちはどうしてそうなるのか、どうして計画を伴ったら良いのか分からない」

「あなたは企画総長だろう。それくらいの認識はあるのだろう」

「私には分らん。中島さん、ひとつあなたの計画を伴って見て下さい。」

「私は顧問だぜ。君達の伴ったものを検討し、意見を加えるのが私の仕事だぜ」

「私の部下にはそれの出来る者がいないのです。中島さん、あなたの案の原稿を作ってください。」

「政府提出はいつだ。何日が締切りだ。」

「〇〇日ですから後四日しかありません。清書、印刷に二日かかるから原稿は二日で作らないと間に合いません」

「二日間か……」

私は徹夜に近い二日を過ごして原稿を書き上げた。

東パの事情が次第に分ってくる私の頭に残るのは、働く意思がありながらその環境ができてないために働けない人達、こうすればよくなると知りながら、貧乏と資材がないためにそれのできない人々、東パという環境に慣れたスポイルされた人達、シャハジャッドプールで玉の汗を出しながら労働した人達、そしてクマカリの子供達……同じ人間であるから、この子供達も日本の子供と同様に、電気の下で本を読む権利があるはずだ。少なくとも、肉体労働を電力に変えて今少し体を楽させる方法があるはずだ。

何とかしてやりたい。何とかして見せる。

長官は冗談まじりの話が旨い。笑いながら、

「東パキスタンでは、官吏はいずれも賄賂をとっている。彼らは賄賂のことのみに急がしく、EPSIC など振向きもしない。私は彼らと戦うためにこのEPSIC で頑張り、その準備もできている。」

ハラキリのペーパーナイフ刃で彼らを殺すか。否。

「EPSIC の長官の部屋は立派だ。ジュウタンが敷いてある。あなたは金持だよ、だから私に紅茶を恵んで下さい。……

私の机はガラクタで下にはジュウタンもない、部屋は狭い。

都会にはあなたと同じような金持が沢山いる。金持の一人のあなたは一つまり長官はジュウタンの上に机を置いていて、クマカリのセンターの苦しみを知らない。ショバランプールのセンターの苦しみを知らない。私の事務所に机がないのを知らない。

その上にこの東パの各地には、まじめに働こうという人間、それでいて恥のないために働けず貧しい人間が沢山いる。私は彼ら貧しい人達のために闘おう。」

「そのために今中島さんは何で困っておるのですか？」

「ショバランプールの従業員の給料が三カ月遅配になっている。すぐ支払の手続を命じて欲しい」

「そういう報告は私の所には来ない。ありがとう。

ボーイ。ラティフラを呼べ。

……

ラティフラ、中島がこんなことを言っている。支払を直ぐやってくれ。」

ラティフラは、「直ぐ調べて処置します」

私はその結果を見届けると

「有りがとう長官様。」

「中島さん、お茶を飲んで行って下さい。」

「いただきます」

長官は賄賂に腐った政界に一矢を報いることを人生の目的とするという。あなたはそれをやりなさい。私は地方の貧しい人々を少しでも助けるためにあなたとファイトするのに人生を捧げたい、と言う。

（この長官が Azizul HUQ である。彼は私より少し年上だった。彼は人物であり頭が切れた。パキスタンの、日本人には少しも美味とは思えない紅茶をすすりながら、私と彼との親交は続いた。彼が東パを貧から救うために政界の人々と闘った姿は誠に立派だった。誕生して間もない EPSIC は、組織を含めてすべての点でみすぼらしいものだった。それを今日の EPSIC に発展させたのは彼である。

そして彼の下にあって、彼の意をくみ、日夜奮闘して東パの中小企業興隆のために頑張ったのが、ラティフラである。次世代の EPSIC の長官になるべき人であろう。その二人の、真摯な姿で中小企業興隆に立ち向う姿を認めたのは私だけではない。……後で出て来るであろう。）

ホテルグリーンの庭は花が植えており、その後に大きな木がある。その木の側に竹よしずの垣があって、竹垣の向うには牛が飼われている。牛は時に竹垣の間から花壇を覗き、花の木の緑の葉を喰いたいと竹垣を押す。するとボーイが飛んで来て牛を怒鳴るのだった。

雨の降らない日は椅子を花壇に持ち出して、後ろの大きな木の葉がくれに出る月を眺めるのだった。まずいビールを口にして。

私は過去を振返った。そしてそれをこの東パの貧しさと比較した。私の過去は決して悠長とした生活ではなかった。苦しみに満ちた生活の連続であった。ここの貧しさは悲惨と表現した方がいいだろう。するとその悲惨を少こ

しでもよくするために、私が力を注いでもよいではないか。

貧しさでスポイルされた人々、官庁であるためにそのしきたりに従って、積極的に物事を進めようとしない人達、その中でこの仕事を進めるのは容易ではいないだろ……。

タマカリの子供達を何とかしよう。何とかして見せるぞ。そして、文明から捨てられたと思えるようなこの国に、機械文明の一部を見せてやろう。私の力の続く限り。そうすることは、彼らの幸福に連るはずだ。働く者には必ず幸福があることを見せよう、いな、働く者には幸福があって良いはずである。

私は決心した。少々邪魔が入るだろう。私を悪く言う奴も出て来るだろう。大変な仕事になるだろう。だが私はやり遂げて見せるぞ。悪く言う奴は悪く言え、良く言う奴はよく言え。何としてでもやってやる、あのCFCを動くようにして見せる。少なくとも、あのクマカリの子供達の手織の重労働を力織機に置き換え、電灯の下で歌を歌えるようにして見せる。

Going my way

私の決心はここで定った。

「長官、私はあなたに迷惑をかけるかも知れない。あなたと口論するかも知れない。だが私はc＝cに力を注いで見ます。ジュウタンの上に座るあなたと違って。地方で苦しんでいる貧しい人達、手織業者を少しでも幸福にするために闘うでしょう。」

「分った中島さん。所であなたの事務机を私の部屋に運んで、中島さんは私と一所にこの部屋で仕事をして下さい」

「書類を拡げるにも充分な事務机がなくて困っていた所です。助かります」

「ミスター中島、君の出勤、欠勤は自由だよ。仕事のための出張は全部認めよう。そして自分で解決できないことは私に持って来てくれ。」
「ありがとう、ミスターハック」

かくして東パキスタンでの長い生活が始まった。それは四年半に及んだ。

東パキスタン後期　前半

私の任務は機械の据付、組立、それより一歩進めてその計画の企画を含む建設に傾いて行った。建設は私の任務外の事だから、手を出すべきでもなく、その必要もないという考え方が官庁の考え方であり、事業団の考え方だった。私は私の任務は運転指導であるが、そのためには設備がなくてはならない、設備が完成していないのならそれを完成し、運転できるようにして運転指導するのも与えられた任務のひとつと広義に解釈することとした。その了解を事業団に申し送った。

さて建設の進行は非常に遅れていた。その計画、進行は私達日本人から見ると常識外の事が多かった。綜合的に進められていないから中途半端であった。でたらめと言っても過言ではない。だがその原因を、建設が旨く進んでいない原因を掘下げて行くと、いずれも予期しない原因、私にとっては「こんなことが」と思われるような原因が横たわっていた。私にはナンセンスと思われる事が多かったが、それを深く掘り下げて行くと東パキスタンの避け得ない事情につまずくのだった。私はそれらをひとつひとつ排除することとした。そのために私の面子がつぶれるだろうと思うことはしばしばだった。又そのために私は現地人を叱り飛ばさねばならなかった。外人の私が、異国人の現地人を叱り飛ばすことは決して良いことではない。私は目的完遂—つまりCFCを完成するために面子を捨て、現地人を叱り飛ばした。打ち合わせ

してひとつの作業を実行しておくようにと言う。数日経って確認して見ると実行されていないので二回目の指令を出す。三回目の指令を出す。それでも実行していない時に私は叱り飛ばした。又はその本人がこうしなければならないと自覚していながら、その自覚を実行していない時に叱った。一月日が経つにつれて上から叱られなければ動かないという現地人の習性があることがわかった。この習性に対応するためには、いやでも怒鳴らざるを得なかった。

時日が経つにつれて、進行の遅い原因は、諸事を進めるに当って決断を下す人がいないことも分った。これは日本の大会社の組織、あるいは官庁の多くに見られる欠点と同じであったが、EPSIC のそれは日本で感ずる以上の責任回避―国情からそうなったのであろうと判断されたが―のために決断はなかなか出ないのだった。それで私は、私自身を悪者とし、「責任回避の必要のある時は中島が命令したから実施したのだ。だから私には責任はない」と言えと彼らに教育し、成功した時には「私の発案で実施したのです」と言えと彼らマネージャーに言い付けた。つまり「成功はすべて君のものである。失敗はすべて中島が責任を取る。安心して君達がこうあるべきだ―と思った事を実施し給え。それでとやかく言う奴は中島の所へ廻してくれ。又そのために困った時はいつでも中島の所へ来てくれ。君自身が、君自身の自主性に立って、君自身でこのセンターを完成するのだ」という方針を取った。

私は彼らが、彼らのセンターを完成するに当って、彼ら自身で努力すること、彼らが彼らの自主性に立って建設を進めて行けば、完成するということを、彼らにさとらせたかったのである。これは私の理想だった。フィリピンに住んだ時、民族の結集というものは、乱してはいけないし、乱し得るものではない、ましてやそれを犯すべきではない。民族が結集し、力を合せ自主性に立って行くことを先進国は援助し、助けて既存の形を取るべきではないかと感じていた私は、東パの私の配下の従業員に、不足している自意識、自

主性を呼び起こし、それによって建設を完成し運転指導したいものと考え、その方向に持って行くべく方針を取った。配下のマネージャーに、“東パ民族でも自主性に立てば、何も日本の中島がいなくても我々で運転できると言う方向を見出させるのだ”それなくしては、ここで CFC が完成しても、私が去った後はそれらが無用の長物となる。

それを自覚さすことは技術援助以上のものである筈だし、それなくしては技術援助は後立たない。（理解してくれた人の一人は Ahmad 氏である。EPSIC never succeed Common Facility Center と住民に言われたシャハジャッドプールにあって、彼は私のこの意を理解して、実によく頑張った。気候、自然から来る悪條件と戦って、彼は自主性を取戻し、センターを完成したのだった。

だが現実の東パの事情はそうでなかった。建設を進め、機械を据付けるには並大抵でない苦しみがあった。それを実施するには、例えどんな小さなことでも上官の指令なしには作業は進行できない組織となっていた。私は顧問である。直列の命令系統には入っていない。だから、私がこうすべきである、こうしなければ駄目だ、こうしてこのようにしなければ機械は二、三日中にだめになる、と進言しても、それを直列の命令系統に入れ、その指令を得るまでに短くて三ヶ月、長い時は一年，二年の歳月を要するのだった。顧問の私の進言でさえそのような状態だから、私の配下のマネージャーの自主性に立った進言は六ヶ月，一年は無視される、いや誰も注視せず、そのまま放って置かれるのは当然だった。「完成して見せる」と決心した私には恐いものは何もなかった。Going my way に徹した私は、その欠点を打破し、完成のためには私を直列の命令系統の中に繰込み、即ち、私のサインで建設作業を進行できる態勢を作ったのだった。

この場合あくまでも失敗による責任はすべて中島になるようにし、現地人には傷の付かぬように気を使ったのは勿論である。

かくして、私は CFC を完成するために、次第に私の方針でワンマンになって行った。否、ワンマンにならなかったら作業は進まなかった。

それをゆっくりかばい、かばい合いつつ、CFC の建設を進めて行ったのは、長官の Mr. Azizul HUQ、次官の Mr. Latifullah、同じく Mr. Islam、会計次官の Mr. Khan、その配下にいた Mr. Kalir、あるいは Mr. Rahman 達である。

私は自分自身で自分の強引さに驚く程強引に完成への道を進むこととした。

輸送中に部品が盗難にあったクマカリのセンターの小型発電機を何とかしなければ、工場の電灯も灯らないし機械も動かない。私はマネージャーが本社に申出たという、輸送中に盗まれた部品の購入要求の文書を捜しながら事情を調べた。結果はその様な文書はどこかの文書の山の中に埋もれていて見当たらないだろう、もし見付かったとして、それに対してアクションを取っても、部品がここに東パに届くまでには二年間を要するだろうということだった。

機械のすべてを輸入に仰ぐこの国の官庁では、先ず予算を立てる、予算申請をして許可を受ける、つぎに外貨割当申請をして許可を受ける、そこでその商品を入札により購入するつまり輸入するわけだが、入札の公示期間だけでも一ヶ月を必要とする、落札が定まり、外貨の割当を受けて、発注の段階までに二ヶ月を要する、（予算、予算申請は国家予算だから年に一回の機会しかない、つまりその許可を得るために既に一年を要することになる。）発注書が供給国、この場合は西ドイツまで届くのに一週間を要する。西ドイツの受注者はそれを同国の通産省に屈出、大蔵省の外貨に対する証明つまり輸出証明を取り舟積みするのに、かなりの期間を要しよう。舟積後東パに届くまでに最低一ヶ月はかかる。東パに到着しても、税関撤退続―輸入手続その他で手に入るのに更に三ヶ月を要しよう。―私の任期は二カ年である。私の任期内に到着することは無理だろう、だったらどうするか？

私は他に同形あるいは代用になる発電機がないかと捜した。本社の文書の上ではメーカーは異るが同じ位の容量の発電機が数台購入されていることが分った。それらはどのプロジェクトに、どの型が何台購入されているか不明だという。その上その発電機が東パに到着しているか、否かわからないという。

「そうか、東パに到着しているか否かを見極めるにはどうすればいいか教えてくれ」「中島さん。チッタゴンに行けば分かるかも知れませんよ」

私は直ぐチッタゴンに飛んだ。チッタゴンは東パキスタン唯一の輸入港である。ここには EPSIC の支所があり倉庫がある。私は倉庫を訪ねる。倉庫には色んな梱包が一パイつまっている。倉庫に入らない機械……輸入されたままの機械の大きな梱包が倉庫の前に雨ざらしに野積されている。大変な数だ。それを見て回る。

「これは発電機と違いますか？」

「中島さん、これは Electric Generator です」彼はそれが発電する機械だということを知らない。

「そうか。これと同じ物は外にないかね？」

「ありますよ。あれと、あの向うの大きな箱です」

「この機械はいつ入荷したのかね？」

「いずれも一年前あるいは一年半前に入荷しています」

「一年前に入荷したものをどうしてここに野積しておくのがね。機械が錆びてしまうよ。どこのプロジェクトのものかね？」

「本社から指令がないから送らないのです。どのプロジェクトに属するかは事務所に行けば分ります。詳しいことは本社の人が知っています。」

「よし事務所に行こう」

事務所、形ばかりの倉庫事務所に着いた私は、パッキングリストを片っ端

からしらべた。ここで知ったことは、倉庫係の一番長となる人でさえ機械名を殆んど知らず、事務を司る面々には英語を殆んど読めないことだった。なるほど、この状況では入荷した機械の発送も充分に行われず、機械が野積みされ、梱包のままとはいえ保守管理に心掛けないのは当然だ。そして旨く行動すれば、彼らは英語は分からないから機械の中味は分からないだろう、すると今見た発電機を何とかごまかして別の機械だと説明してクマカリに転用できる。

発電機はチョウホモニの CFC センター及びタンガイルのセンター用に購入されたものだった。同じ CFC プロジェクトのものである。よし転用してやろう。

「倉庫係のマネージャーさん、この発電機、ケース番号△△△△、LC 番号〇〇〇〇のこの梱包、つまりあそこにある機械を直ぐクマカリに送ってくれ」

「本社から発送指令者が来ないと送れません」

「私は CFC の建設の代表、つまり本社を代表して来ている。私が書く指図書で送れるか？」

「いいと思います。」

「君達は要するに誰かの指図書がいるのだろう。よしここであの発電機をクマカリに送れという指図書を作れ、私がサインする」

本社では入荷しているか否か不明だと言う。チッタゴンでは送り先が不明で一年間野積みさしている。クマカリでは喉から手の出る思いで待っている。周囲の状況から考えて見て、もし私がここで手を下さなかったら恐らく後一年～二年これらの小型発電機はこのまま野積みのままだろう。そうなればいかに梱包が完全といっても中味は錆びて使いものになるまい。ここで錆びさす位なら、プロジェクトは違ってもクマカリに転用して、使えるだけ使った方が得だ。……私はあっさり転用することに決めた。

ダッカに帰った私は Mr. Rahman を獲える。

「ラマンさん、チョウモホニのセンター用に輸入された発電機をクマカリに送るよう手配してくれ。假の指図書は出してあるが、正式のを出してくれ」

「ミスター中島。転用は大変ですよ。転用の許可を取るまでに六ヶ月位かかりますよ。正式の転用許可は簡単にはできません」

「そうか。では方法を考える。とに角君には迷惑はかけないから発送指図を出してくれ」

正式の手続ではとても間に合わない。私は一時貸与の方法を取らせた。所が一時貸与の許可証にサインする役人がいない。これは形式上違犯だと言う。私は長官に相談した。長官は笑いながら「私の地位ではそれは許可できん。私はそういう違法を行う人を監視し罰するのが役目だよ。だけれどこれを持って行く様に」長官はすらすらとメモした紙を私に渡した。それには、「中島の言分に協力するように」と書いてあって、肝心のことは何ひとつ書いてない。彼はそれで彼の転務の地位に反しない。

私はその紙片をラマンさんの所へ持って行く。長官のサインが入っている紙片だ。

「この通りだ。直ぐ発電機を発送するよう指図し給へ」

「分った。電話で言い付ける」

「OK だ」

なるほど、電話での命令なら後に証據が残らぬわけだ。後で問題が生じた時いくらでもいい逃げができる。

一ヶ月経ったが発送された形跡がない。私は又チッタゴンに飛んだ。

「マネージャー。どうしてクマカリに発電機を発送しないのか？」

「指図書がないので……」

「何だと。私がこの前来た時に指図書をここで作った筈だ。それを信用できぬのか？」

「……」

「正式の指図をラマン君が電話で出しているはずだが」

「私の所には何も言って来てません」

「ようし、これが指図書だ。直ぐ発送してくれ」

私は、私とラマン氏との協議の結果、発電機をクマカリに送る事に同意したことを証明する。と書いて私のサインをした書類を出す。

「所で発送するのはいつになるか？」

「貸車の手配が問題です。いつになるか分りません」

「一ヶ月前にここに来た時マネージャーは直ぐ送ると言っただろう。それをきょうは貸車の手配がどうの、こうのと言うのはどういう事だ。するとマネージャーはこの一ヶ月間何もしてないと言うことだね。」

「……」

「今直ぐ便をやって貸車の手配をしなさい。私はあの梱包が動くまでここを動かないぞ」

「ミスター中島、間違なく発送するからきょうはホテルに引上げて休んで下さい」

「本当か」

「はい」

私はホテルに引上げた。

翌日私は出勤時間の午前八時に EPSIC の支所に行った。事務所は二、三人のベアラ（小使）と二人の事務官が出勤しているだけで室内はガランとしている。私は支所長室に入り三十分程待たされた。九時前に現れた支所長に尋ねる。

「EPSIC の出勤時間は午前八時と聞いているが、このように遅く出勤してもよいのですか。もしそうなら私も明日は遅く出勤して良いですか？」

「ミスター中島、その件はちょっと待ってくれ。遅くなるのは他に言わないで欲しい。所でどんな用事ですか」

「倉庫のマネージャーが動かない。あなたから指令を出していただきたい。」

「すぐやらせる。所で日本はいい国と聞くが……」

「私は忙しいのだ。今度にしよう。さよなら。」

翌日は午前八時に倉庫へ一人で駆け付けた。案の定で宿直と夜警がいるだけである。発電機の梱包はそのままである。九時にマネージャーが現れる。先に来ていた私を見てマネージャーはびっくりしている。彼は彼なりに東パで普通と考えられている遅れて来たことを悪びれているようである。

「マネージャー君、発送してないようだね」

「忙しくて……」

「出勤時間は八時なのに君は九時に現れている。それで忙しくて発送の手続が出来てないと言うのかね？」

「つまり、その」

「言訳は私には通用せん。さっさっとやれ。君が行動を起こすまで私はこの椅子から動かん」

私は午前中椅子に掛けていた。やっと発送の準備ができた。夕方私はダッカに引上げた。

数週後にクマカリから文書が送られて来た。機械が到着したが処理方法が分らず困っている、中島に出張を頼むというものだった。私はカデール君と一緒にクマカリに飛んだ。

「発電機はどこにある」

「駅の構内に貸車に積んだままです」

「どうして、降ろしてここに運び込まないのか？」

「貸車から降ろすのにクレーンの手配をしなければなりません。一週間前に手配したのですか、クレーンが来てくれません」

「交渉先に電話しろ。そうして直ぐ来るように言え」

「OKです。直ぐ電話します。中島さんから言って下さると効目があると思いますから、一所に行って下さい。」

私達は郵便局に行き通話を申し込んだ。相手が出るのに二時間を要した。

「ハロー、私は中島と言うものだが、コロンボ計画で EPSIC に来ている。所でクレーンを至急借りたいのだが明日お願いできないか？」

「ハロー、ハロー　アイキャンノット……」

「チョウドリ（マネージャー)、相手は英語が分らんようだ、現地語で話してくれ。」

「中島さん、クレーンを借りるのは十日先になるそうです」

「なに、十日もかかる。だめだ。中島は日本からパキスタン国の要請で来ている。つまりパキスタン国の要請で日本から外務省の要請で来ている。十日も待てないと伝えてくれ。もし十日もかかるのなら私は鉄道省に申出てそのように手続するぞと言ってくれ」

この国の国情に慣れて来た私は、官史が上役にとても弱いことを知っていた。物は方便だ、私の役名と権利でおどしてやろう。そうすれば何とか旨く物事が運ぶはずだ。

「中島さん、緊急手配して明日クレーン車が来てくれるそうです」

「良かったな、マネージャー。EPSIC が鉄道省に払う貸車の賃貸料十日分、二〇〇ルピーが節約できたねー。所で駅からセンターまでの輸送はどうする。人力で引張るか、牛にひかせるか？」

「道の修理が必要です。運搬は手に引張らせましょう。人夫を雇う必要があります」

「いいだろう。人夫を雇うことを認めるという書類を作れ、私がサインしてやる。

私は一週間後に来る。それまでに梱包をあけて原動室の所定の位置に入れておいてくれ」

「中島さん必ず来て下さい。中島が来てくれないと仕事がはかどりません」

シャハジヤッドプールの仕事を終えてクマカリに来て見ると、私が叱汰し、手を下してやっと運んだ小型発電機は原動室の前に梱包されたまま置いてある。

「どうして開梱しないのだ。やっとここまで運んだ発電機ではないか。一日も早く日の目を見せろ」

「開梱できません。箱の一部が開けられています。又、泥棒が部品を盗んで行った懸念があります。この機械は運送保険を掛けてありますので、部品は保険会社に申出て損害額を辨償してもらわねばなりません。そのためには保険会社の指定する立会人の立会の下に解梱し、損償の証明書を作らねばなりません」

「難かしい手続が要るのだね。その立会人を呼び寄せるには何日ぐらいかかるか？」

「書類を呈出し、手続を経て、立会解梱には二〜四ヶ月かかるでしょう」

「二ヶ月かかる。そんなにかかるのか？」

「早くて二ヶ月、長ければ六ヶ月かかるでしょう」

マネージャーは、簡単に言ってくれる。

「お前この酷暑の中に機械を六ヶ月寝させて見ろ、機械はどうなるか知っているか」

「ミスターナカジマ、それが輸入品取扱の規則なのです。私は前の発電機の解梱の時それをしなかったので、罰則を通用されているのです。機械が錆びて駄目になる、ならないは罰則の適用外です。」

「めんどうくさいのだな。解梱しちまえよ」

「ミスター、それは駄目です。もし部品を盗まれていたら、保険会社立会人の立会なしに解梱したということで、私の責任を問われます」

「そうか。ところで荷造の箱をめくられているという所はどこだ」

「この部分です」

現物を見ながら私は頭を回転させていた。部品を盗まれていたら、その部品補給に二年かかる。……それよりも一年半以上雨ざらしされたこの発電機は錆び付いて駄目になっていないだろうか……もしそうなら次ぎの発電機の輸送手配をすぐしなければならぬ、……使用できぬ状態ならこれの令後の処分方法を考えねばならない……立会人なしではマネージャーが責任を問われる……馬鹿者、盗まれた物がこの国で返ってくるものか……

「マネージャー、ハンマーとバールを持って来い。そしてお前は向うの方を向いていてくれ。私が解梱する。お前は、“私の知らない間に日本から来た中島が勝手に解梱したから、私の責任ではない”と本社宛に報告書をタイプしてこい。“上記のマネージャーの報告は正しいものである”と私が〇書をつけ、サインをしてあげる。」

私はバールで解梱を始めた。解梱された機械は極小部を除いて錆びていなかった。部品は完全だった。ただ取扱者、カタログと小さな電線が一本盗まれていた。

「原動室に運び込めよ」

そこにいた色の黒い全員が私と一緒に汗を流した。破損していないのを皆が喜んだ。

（七カ所あるセンターの中で、私の在任中にフルに近い状態で稼働したのはこのクマカリのセンターである。センターにこの小型の発電機が運び込まれなかったら、このセンターは私の在任中無用の長物化となったであろう。又私が東パの常識の道つまり文書の形式通りの道を歩んでいたら、このセンターの開設は五、六年遅れていただろう。五、六年遅れていたら、そこに設置された日本製を主体とする約一億円相当の各繊維機械はその間に錆化して無用の長物化したことだろう。私は他のセンターに属するこの発電機を転用することに非合法な方法を用いている。があえて私は悪い事をしたとは思っていない。強引に押し進めた事は多少後悔している。いずれにしても、このセンターの成功はこの小型発電機があったからである。

そして、クマカリの町の人々は、町の創立以来四百年にして、始めて電灯の灯を見たのだった。

私の指図文書にある時はインチキを書いた私の後悔は、電灯の下で喜々としているクマカリの子供達の顔で消されて行った。）

ショルプカティはバリサールから小舟に乗って六時間の所にあるいなかだった。ここには電話はない、警察まで行くのに舟に乗って三十分もかかる電気のない辺境だった。木材及びココナットの集散地であったので、EPSICはそれらの産業を興隆さすために試験的に小さな工場を経営することになっていた。その工場の機械は日本の沖見工業㈱から輸入され組立開始となっていたが、肝心の小型発電機のことが忘れられていた。ここには発電機を据付ける建物の計画も忘れていた。いな設計者は日本から来たそれらの機械の運転には電気がいるというのを知らなかったのだった。

私は現地人の尻を叩き、早急に小さな原動室の建築を始めさせた。いつものように、建築の係官の前にどっかと座り、彼が建築施行の仕事を始めるまで私は動かなかった。

私は又にチッタゴンを飛び小型発電機の手配に奔走した。クマカリの件で

手順を覚えた私は、彼らにとやかく言わせなかった。交通不便なショルプカティに総重量五トンに及ぶ大きな梱包を送り込むには運搬方法に問題が生ずる。道がないからトラックでは行けない。船で送るとして、そのような重量物を積めるものを特別契約で頼むわけだが、それだけの重量物を積める船があるだろうか、又その船はショルプカティまでの浅い川を上って行けるだろうか、積込み、積落しの時のクレーンをどうするか等々……。

東パの事情が少しは分かったものの、そのような細部は新参の私には分からない。それで私は、とに角再輸送させて見て問題が生じたらその都度対処する方法を取るようにした。彼等もその様な大重量物……日本では重量物にならないが……を運搬するのはこの地域では始めてで無経験であるから先を予想することは無理だった。

プッシュにつぐプッシュを行って、発電機は四ヶ月後にやっとショルプカティに陸上げされた。私は要請されて直ぐ現地に飛び、解梱の立会を行った。

さて開けて見るとセルモーターとバッテリーが輸送の途中で泥棒に盗まれていた。私達がえいえいとただ一すじに輸送に費やした努力は水泡に帰した。四ヶ月間の私の強引なプッシュはすべて無に帰した。物資の豊富な国ならすぐ電話して予備品を取寄せることができる。ここではダッカに電報打っても三日を要する所だ。部品は国内で入手できぬこと、それの輸入手続には二年かかることは先に述べた。泥棒を捕えて殺したやりたい思いである。

「マネージャーさん、盗られた品物はこの国では特殊品だ。そしてここはいなかだ。調べれば泥棒が誰か見当つくだろう。徹底的に調べて泥棒を締め上げる方法はないだろうか」

「調べても泥棒は見つからんと思いますが」

「そうだろうか、調べて泥棒を引張り出し、部品を取り返したい」

「泥棒を見付けても品物は返りませんよ。泥棒は自分が危ないと思ったら証據をなくするためにその盗品を河の中に捨ててしまいますよ」

「そうか調査を進める事によって、使えるものまで河の中に捨ててしまうか……。もし調査を進めなかったら、泥棒はそれを売り飛ばし、買った人間は何らかの形でそれを有効に使える、盗まれた品物はこの物資のない東パのどこかで有益に使われるわけだね。それの方が河に捨てられるより良いねー」

私は理に合ったような、合わないような気持で泥棒を容認せざるを得なかった。

残った現実の問題は対処法である。盗難に会った事を正式に報告し、正規の手続を進めていたのでは、一年経っても工場の機械は動かぬだろう。それでクマカリ向けに行ったと同じような方法で他のものを転用することに決心した。

私はチッタゴンに行き、幸い同型の小型発電機が在庫しているのを見付けた。私は係員達を強引に説き伏せて発送するようにした。この発電機が現地に届くには更に四ヶ月を要した。その間私は担当の係員達に早くしろ早くしろと毎日のように怒鳴っていた。

到着した今度の発電機は部品は盗まれていなかったが、エンジンのピストン部が錆び焼け付いていて動かなかった。

「仕方がない。前の機械に今度の機械の部品を取付けろ。二台で一台の機械を組立てるのだ」

「それを行うには責任者（オーソリティ）の許可がいります。許可なしに行うことは出来ません」

「許可もへチマもあるものか。取換えろと言ったら取換えろ。やれと言ったらやれ。私が全責任を持つ」

「マネージャーさん。私達は一台目のものに四ヶ月と多大の運賃を損した。二台目のものにも四ヶ月と多くの費用をかけた。私はこれを進行さすためにオフィサー達を随分叱った。怒鳴った。どうしてこんなに遅いのかと。そし

て到着したらこの通りだ。この私にこれ以上オーソリティの許可あるまで待てと言うのか……。」

「ミスター中島がいてくれるから、やっとここまで来たけれど、もしあなたがいなかったら……」

「中島なんかいても、いなくてもどうでも良い。一日も早く部品を取換えて、工場に据付けた機械を動かすのだ。そしてこのいなかに、EPSIC がやろうとしている工業化の火を灯して皆に見せるのだ。一所に元気にやろう。」

「東パという国は大変な国です。私は東パ人ですが東パ嫌になります」

「ミスターラマン。東パは君の祖国だ。その祖国を少しでも住み良くするのは君の使命であって私の使命ではない。住み良くするために君が努力して困ったことは私が助けよう。私の使命は君の責任を助けること。私を利用しなさい。」

東パキスタン後期　後半

タンガイルのセンターにはボイラーがある。経染機がある。糊付機もある。これらの機械はいずれも水道水の供給があって用を足す。私の任務はそれらを運転し、機械操作を彼らに教えることである。

所が水道がない。唯一つの水源はガタンゴト、ガタンゴトと音を出す手押しポンプ一つだけ、しかもその水は鉄分の臭いのぷんぷんするものだった。

「水道はどうなっているかね」

「あそこに掘抜井戸を作ることになっています。工事は二年前から初めております」

「なっていますでは機械は動かせない。井戸はどうして完成していないのか？」

「堀抜井戸請負業者が仕事を進めないのです」

「誰だその請負業者は？　直ぐ呼べ」

「私が請負業者です。アクバーホサインと言います。」

「どうして井戸工事を進めないのだ？」

「いろいろ事情があります。第一この EPSIC は私達に今までの契約金を払ってくれません。第二にこの仕事を完成しても EPSIC は出来高を払うかどうか分かりません。第三に契約時にミスがあります。第四に彼らは私達を……」

「ホサインさん。理由は聞きたくない。とに角完成してくれ」

「金の支払はどうなりますか。この井戸は契約時に設計者のミスがあって……」

「費用がいくらかかろうが、かかるまいが完成しろ。完成して後に話そう」

「それは無理です。この国では。……井戸の設計では径は六インチです。井戸から貯水タンクまで約三十メートルありますがその配管が一インチです。貯水タンクの大きさは一万ガロンです。そのパイプは支給されることになっていますが、まだ支給されていません。」

「もう一度言ってくれ。……後のことは私がタッチする。変更する。だけど理由は後で聞く、井戸掘を完成しろ」

「完成しても支給されることになっているポンプが二年経ってもまだ支給されません。完成は無意味です。」

「文句言うな。だまれ。井戸掘を完成しろ」

「私は中島を信用してもよいでしょうか」

「いつまでに完成するか？」

「できるだけ早くやります」

「やれ。完成しろ。……ホサイン私は日本から来た。よく怒鳴る人間だぜ……ハハハ」

彼は契約金額を無視して損を覚悟で井戸堀作業を開始した。徹夜作業をやって二十日間で完成した。徹夜の時には私も立会った。

私は暇を見てポンプの手配、配管径の変更、そのパイプの購入、支給をするために事務所の程度の低いオフィサー達を懇切に指導し、作業進行をプッシュした。

パイプの運搬の手配が心配だった私は、遂に輸送するトラックの運転台に飛乗って同行した。運転手がグルになって輸送中のパイプを横流しできないようにするために。又約束の時間に届けるために。夏の暑い日だった。

私が約束の日に届けるためにトラックに乗って出掛けたのを、請負業者ホサインはじーっと見ていた。

一般にコロンボ計画の専門家は顧門という偉い地位の人だから―？　―トラックなどに乗ってはいけない―？

……・……・……・……・……・……・……・……

「クマカリの掘抜井戸はどうなっているか？」

「井戸は完成しています。水道の配管も全部終わっています。ポンプがないので動いていません」

「ポンプがないとはどういうことだ？　請負業者はどこにいる」

「請負業者は仕事が終わったので引上げています」

「ポンプ据寸は請負業に含まれているのかそれとも別業者になっているのか？ポンプは何処にあるのか？」

「書類が見当たらないので分かりません。ポンプはチッタゴンにあるようです」

「私はチッタゴンに行く。書類を見付けて据付作業、試運転は請負業者に含まれているかどうか調べておいてくれ」

チッタゴンの倉庫に入った私は、ポンプの梱包を見付けて、直ぐ発送するよう手配する。ダッカに帰って見ると、

「書類が見付かりません。だから分かりません」

「EPSIC のオフィサー達はみんな書類のたらい回しだけしていて、肝心の

書類が見付からないのか。仕方あるまい。請負業のホサインを呼んで、彼にポンプの据付、試運転をやらせてくれ」

「官庁の仕事はすべて入札でやらなくてはなりません。ですからホサインと指定するのは無理です。できません。」

「分かったよ。七カ所のセンターがある。水道、井戸はそれぞれ入札して請負業者を定め、完成までということで契約している。クマカリは水は出てない。シャハジャトプールは井戸掘も終わってない。ショバランプールはどうだ、工事の形跡もない。バリサールの請負業はどこにいる。みんな相変わらず手押ポンプだ。バイラブは、あれじゃ駄目だよ、ポンプを回してモーターが焼け付いても水は出ないよ。ヘッドが十メートルのポンプでヘッド差二十メートルの貯水タンクにどうして水が上るか。しかもタンクは七千ガロンで送水管は一インチであるパブナの団地も水は出てない。ただひとりタンガイルだけが完成している。ホサインがやったからだ。だから私はホサインを推せんする。クマカリのポンプが据付、試運転を、出来高払いでやらせろ」

「規制によると入札以外に工事を発注するわけに行かない」

「いいからホサインに発注しろ」

「難しいです。問題が生じます」

「宜しい。私はホサインにやらせる」

……

「ホサイン、ポンプの据付と試運転をやってくれ。結果を知りたいな。いつ完成する？」

「直ぐやります」

二週間後に彼は現れた。

「水を貯水タンクに上げるために配管をやり直しました。貯水タンクに貯めた水を各所に流すべく主バルブを開けたら、主配管のジョイントから水が吹き出して大騒ぎしました。どうしてでしょう」

「ジョイント部はどうなってた。ソケットか、フランジか？四インチ配管だから普通フランジのはずだが」

「五インチのネジなしソケットに四インチのパイプを両側から押込み、隙間にパッキンを叩き込んでました。水の流れる管は四インチ、つまりジョイントに五インチ管を使って両側から押込みスキ間にパッキンを押し込んだのです。配管図がこれです」

「ハ、ハ、ハ、そうか。ホサインさん、めんどうだがこの主配管を全部掘起してくれ。ジョイント部をネジ付のソケット又はフランゲ接続に全部やり直してくれ」

「配管は別の請負業者が実施し、完成報告を提出し、工事全ての支払を受けています。それを私がやると……」

「追加工事してやれ。やれと言ったらやれ。ホサインさん。君の工事は信用できるよ」

「ミスターナカジマの言う事だったら、私は損をしてもやります。OK です。」

（アクバーホサインとの交流は在東パ中ずーっと続いた。私の家族が到着後は家族ぐるみの交流だった。私は彼を信用し、彼は私を信用できた。EPSIC には多数の請負業者が出入りしたが、彼のやった仕事は信用できた。その他は信用と程遠いものだった。問題にぶつかると彼を呼出して解決させた。その代わり或程度の仕事の便宜を与えた。ただし彼対私の間に、仕事を与えたためというリベートのようなものは何ひとつなかったことを明言する。）

このような状況のもとにクマカリの井戸―水道は完成した。試運転の時蛇口からほとばし出る水に、真黒の背をした子供達は喜にとして戯れ、飛び散る水を互いに相手にかけ合って喜んでいた。

“ ただ水が出だしただけではないか。日本ではどこにでもある事なのに、ここでは子供達が喜び、大人達はそれをじーっと見ている ” 私は感ずること

が多かった。

この井戸水の水道には余談がある。その後のある時クマカリに泊まった私ははげしい下痢、おう吐発熱で苦しんだ。腐敗物を食べた覚えのない私は、マネージャーの助けを借りて原因の追求を行った。炊事コックが赤痢にかかっており、彼は何らの手当なしに私の食事を準備していたのだった。「炊事に使う水はどこの水を使っているか？」私はためしに聞いた。「池の水を使っています」池は宿舎の前にあり、水浴をし、洗濯を行い、下水が流れ込む溜池である。現地人はそこで倉器を洗うことは知っていた。「ここには工場用水道ができた。どうして水道の水で食事の準備をしないのか。させないのか？」

「池には魚が泳いでいます。水道の水はバケツに入れて魚をいれておくと魚が死にます。水道の水には生命に悪いものが入っています。だから池の水で飯を炊くのです」

私はその理が合っているのに驚いた。……そうか、それで私も赤痢に見舞われたのか。

「理由の如何を問わず、私の食事は水道水で準備すること」と命じた。彼らは私の食事の準備には水道水を使用し、彼らのものには相変わらず池の水を使用した。

私は私が実験者の立場になって、水道水で炊事した食物を食べても体に異常のないこと示したのだった。……。三ヶ月後、付近の人達は水道水を使用するようになった。

△△△△△△△△

シヨバランプールの井戸—水道は、貯水タンク及び供給の水道配管は完成したことになっていた。井戸掘及びポンプの据付が未着手だった。私は請負業者を呼び出し、早急に完成するよう叱った。六ヶ月後井戸とポンプは完成

した。だが供給側の地中に設けた主パイプと枝配管が接続されていないので、水は一滴も出なかった。私は、機械組立班の反対を押し切って、地下埋設パイプを全部掘起させ、ばらし、最初からやり直させた。

当事者達は「あの配管は〇〇請負業者が完成し、工事代金も支払われている。従ってやり直しは請負業者にやらすべきであり、機械組立班にやらすことはできない」との言い分だった。「請負業者は信用できない。請負業にやらすと年月を要し、しかも元のもくあみになる恐れがある。機械班にやらせろ。君が請負業者を支持するなら、他のセンターの例をどのように私に説明するか？　シャハジャットプール……、パブナ……、バイラブ……、クマカリ……。君はそれでも請負業にやらせると言うのか？」

……

このようにしてここの自家水道は完成した。

シャハジャットプールのそれは請負業者を呼び出すのに十数回の電報を打った。やっと現れた業者が皆から大目玉をくらったのは当然だった。

一年前に契約をもらっていたその業者は、契約事項に基づいてしぶしぶ工事を始めた。しばらくすると、以前と同様に又々ドロンをきめ込んだ。「業者がでてくるまで電報を打て。二日置きに打ってくれ」

「そうまでしなくても良いと思います。そんなにすると電報代が無駄です」

「電報代がないのなら私のお金を使え。とに角業者に工事を再開させろ」

私はポケットからお金を取り出して事務員に持たせた。

ここのマネージャー Mr. S, H, Ahmad は私の意を解して工事の再開に意をそそいだ。完成に八ヶ月を要した。

バイラブの自家水道の完成には三年と数ヶ月を要した。着任前に完成されたここの井戸は現地人で設立した小さなエンジニアリング会社—私に言わせ

ればインチキとしか写らなかったが一がコンサルタントとなって設計し完成していた。地上高約十メートルにある六千ガロンの貯水タンクに、地下十又は二十メートルの所から揚水頭高十メートル前後と思われる〇・五馬力位の大きさのタービンポンプで、一インチの配管で送水するように完成されていた。私はその不備を指摘し、配管径を二インチに変更し、ポンプを揚水頭高二十メートル以上のもの、又は三段の掘抜井戸用ポンプの設置をするよう言いつけた。

問題は前のコンサルタントの介入にあった。どこでもあるように、エンジニアリング会社はそれ専門のコンサルタントであり、私は繊維の技術者であるから、繊維の私はそういうことに関与すべきでないという考え方である。その上にここでは、コンサルタントの設計に基づいて工事は完成し、工事代金は支払われていた。だから工事をやり直すには先に支払われている代金の処置をどうするかということ、コンサルタントの設計の検討をしてその間違いを正す証明を誰がするかという疑問が生じる。そしてその問題を指摘すると、そのような間違いがあるにも拘わらず、それを認め契約した官吏の責任が追究されることになる。

その上に、私に不備を指摘されたことを又聞きで知ったそのコンサルタント役をした人間は直ぐにドロンをきめ込んで雲隠れしてしまった。他方私は、工事を私の思ったように強引に進行するにも、予算がコンサルタントの設計で組まれ、それは支払済みで残余金のないことに悩まされた。そして一番の難点は、揚水頭二十メートルのポンプが国内の市場になく、新しく輸入するしか方法のないことだった。幾らお金があったとしても物がなければ仕方がない。これは東パの悩みであった。当時の長官が決断を下して、コンサルタントの問題は未解決のまま再入札を行い着工した。

発電機、井戸による自家水道と平行して繊維機械の据付、組立も実施して

いった。着任前に計画、立案され、購入されていたセンターの機械類が東パの手織の事情にマッチしないので、それらを組立ててもそのままでは役立たないことは先に書いた。その計画は、準備工程をセンターで行い、整経済のビームを手織業者に供給し、彼らが製織工程を行って、製織品を再びセンターに運んで仕上工程を行うように計画されていた。

所がセンターに設置される機械はマスプロ形式、すなわち大工場に用いられる機械類であって、石油ランプの下でコットン、コットンと手で織る繊機に応用できるようなものでなかった。従ってセンターは、準備工程と仕上、加工工程を有する中途半端な小工場となってしまう。それが無意味なことは少しでも繊維工業にタッチした人には理解される。その上それらの機械は二年前に輸入され雨にさらされて発錆していた。機械の種類、数が不充分な上に、附属部品の揃ったものは皆無だった。だから当時私は、「全くデタラメの計画」と評した。

だがそれを何とかすると私は決心したのだから、私自身で有意義化の道を見付け実施しなければならない。私は完成にあたって、有意義化の方向を次のように自己流にでも作らなければならなかった。

一、それらの機械は役立たないから据付けないで置くと、発錆して鉄の塊りになるであろう。錆びて同じように鉄塊にするなら、組立てて使用せずに置いて鉄塊にしても同じである。後者の方が前者よりも、現地人が機械を見ただけ有意義である。

一、力織機による製織工程をセンターに設置する。そうすることは従来のセンターの主旨、手織業者へのサービスを目的としたうたい文句に一部及するかも知れない。だがそうすることにより、前の機械の一部は有用化され、附近手織業は近代の力織機法の技術、文明の機械を知ることができる。

一、センターは完成しても商業ベースには乗らない。従ってデモストレー

ション機関の性格を持たせつつ、半生産を行いながら現地人の訓練という方向を持たせる。

一、センターを完成することにより必然的に電気、水道を完成することとなる。生まれて以来それらを見たことのない地方の人々に、それを現実に見せることは彼らを文明に一歩近づかせることとなる。この間接の利益は非常に有意義である。又彼らは同じ人間として、文明に近づく権利があってよいはずだ。

一、センターは有意義化の道を、センター自身で創生すべきである。センターは無の所に、現実の小工場という存在を創生し、方針も又これから創生するのである。

私はそういう考えの下に任務を進めて行った。仕事の上でフィリピンで得た体験は非常に役立った。フィリピンで鍛えたので英語には困らなかった。岩崎教授からいただいた Going my way は常に念頭にあった。

仕事を進めるための周囲の環境は決して良くはなかった。私は環境が良くないと不平を言う前に、自分自身でそれを良い方向に改良するのが自分の責任と考えた。住み難い所、それを少しでも住み良くするのが自分の責任と思っていた。

現実の仕事は無から有を作り出すことだった。「電気がないから機械は動きません」—で済ますわけには行かなかった。「水がないから、染色機械は動きません」—と責任を逃れる訳には行かなかった。「付属部品がないから、巻返機は動かない」—の言い逃げはできなかった。「予算がないから付属部品は購入できません」—は口実とならなかった。「それならその予算を確保し、部品を揃えて動かすのだ」と考えねばならなかったし、「従業員の質が悪いから—事実教育程度は低くて随分困った—作業は進まない」—とは言えなかった。「自身でそれを質の良い方に指導するのが私の責務」となってい

た。

だから、文明の機械を聞いたことも、見たこともない彼らを相手にして、私は一から十まで走り回らなければならなかった。小さな事から大きいことまで、彼らがそれを理解しない限り、彼らがそれを一人で処置できるようになるまで指導しなければならなかった。

着任前に購入された機械は赤く錆びていた。梱包を開けるとねずみが中に巣をしていたり、白蟻が木部を食べ盡していたものがあった。シャフトは錆び付き、モーターは水を被ったのが大半だった。一台一千万円以上するカレンダーのペーパーロールは水にふやけて、にぎりこぶし大の孔があいていた。巻取機のシャフトの錆落としに、三人の労働者が一週間かかるという状態だった。

しかもその錆落としをする工具がない。組立を進めるモンキーがない、スパナがない。この国では国産品は何もないので、それらはいずれも輸入に仰いでいた。従ってそれは高価で品数は非常に少ない。やっと購入する、するとそれは泥棒にやられるという悪循環である。

私はふと思った。彼らは生まれて初めて機械を見る。従って彼らは、日本から輸入された、それらの錆びた、半分使いものにならない機械を見て、「機械とはこういうものだ。機械はすべてゴリゴリこすって錆落としをし、組立てて動かすとガタガタ音を立てるもの」と覚え込むに違いない。日本製が大部分のこの機械を見て、彼らは日本の機械はこういうものと丸覚えしてしまう。彼らは錆びてないシャフトを見たことがないし、スムーズに音もなく回る機械を見たことがないのだ。従って彼らは錆びないように保存すれば、錆び落としをしなくても機械は組立てられ運転できるものだということを知らずに過ごしてしまう。これを知らせることは重要なのだが、では彼らにそれを知らせるにはどうしたらよいか？　解決法は彼らに錆びてない機械を見せることだ。そのためには、いつも発送の遅れるチッタゴンの倉庫に行き、輸

入された機械を一年も二年も野天に放りっぱなしにしないで、入庫したらすぐ発送さすことだ。

そうすれば、彼らの認識を変えられる。そして錆落としの手間が省ける。

一九六四年八月のある日私は日本から輸入された力織機が到着したことを知ってチッタゴンに飛んだ。倉庫には到着した梱包木箱の新しい白さが目立つ大きな荷物が約三十個野天に放り出されていた。八月は雨期である。雨期の激しい雨がその木の目も新しい荷物の上をジャージャーと濡らしているではないか。

「どうして、この荷物を倉庫内に運び込まんのか。今日直ぐ全部倉庫内に入れろ」

「倉庫は全部一ぱいで余裕がありません。それにここにはクレーンもありません。あの重い荷物をどうして運びますか？」

「第一倉庫にはセメントが五万俵、第二に倉庫には機械類が一ぱい。向こうには……」

「セメントが五万俵、このセメントはいつ入荷したのか？」

「昨年の十二月です」

「昨年の十二月に入荷したものを、いままで積んでおいたらセメントは風化して固まってしまうぞ。どうして今までに出荷してしまわないのか？」

「本社からの出荷指図がないからです。指図なしには動けません」

「そうか、だから本社は……。よしこのセメントは何とかする。所で第二の倉庫の機械はいつ入庫したものだ？」

「一九六一年に入庫してますから三年経っています。軽工業訓練センターのもので、これも指示がありませんので」

「どこかにあの繊維機械を入れる所はあるだろう。入れる所がないのならせめて雨覆でもしろ」

「雨覆カバーはここには二枚あるだけです。入れる余裕のある倉庫はあり

ません」

「この荷物はいつ入荷したか？」

「本年の五月です」

「五月に入荷して今日までこの雨期の天の下で雨ざらしにしたのか、どうして私に早く知らさなかったか？」

「仕方がありません。ここにはその他に方法がありません」

……

私はザァーザァー降る雨に濡れている、日本から到着した力織機の梱包をじーっと見ていた。“この力織機を入手するには随分と苦労した。予算を無断―？―で転用している。その説明に随分苦労した。センターはその到着を首を長くして待っている。私は何とかして錆びない中にセンターまで送り込みたいと思っていた。通知が遅かったので三ヶ月雨ざらしにした。そして今日は地面が赤土のこの広場にはトラックはスリップして入れない。発送できない”一年近くになる倉庫の輸入セメント、これは一日も早く処分しなければ使えなくなってしまう。入荷してから八ヶ月経て、一部は風化して固くなっている。第二倉庫の機械類、これも当然プロジェクトに送られて活用されていいはずだのに……。

私は「技術者の愛する機械が目の前にある。機械を錆びさすことは技術者の恥……」と強く感じていた。私は雨の中に飛び込んで、自分の手で雨のかからぬ所に移動したい衝動に駆られた。

だが目の前の梱包は、一個で長さ二メートル、中一メートル、高さ一メートル、重量一・五トンもあり、私達がどんなに力んで見ても動くものではない。場所はない。荷扱機はない。

私は雨に濡れる箱、一部は泥の中にめり込んだ機械の箱をじーっと見ていた。

あきらめざるを得ない。あきらめよう。「しかし明年は決してこの二の舞はやらないぞ」と私は心に誓っていた。

雨が終わって乾期に入り、十一月の或日それらはセンターに到着した。再三、再四の努力でトラックが手配され、貨車が手配された。解梱したら二十パーセントは発錆していた。この程度の発錆で済んだのを見て、従業員達は立派な機械－？－と感歎し、喜んだ。

セメントはその年の九月に、私の強引な要求でバーゲンセールを行わせた。風化して塊にして捨てさせるよりも、市場に一日でも早く出して使用できるだけ使った方が国家の利益である。セメントはこの国では貴重な輸入品であった。

軽工業センターの機械をプロジェクトに届けて日の眼を見せるにはなお二年要した。私の強力な進言で長官は同訓練センターの着工完成を早急にスタートさせたが、介入した建築請負業が素人だったために、色んな問題が生じ、完成が遅れた。私はそこの係員を手なずけて、許可の出てないままで先ず訓練センターの倉庫を完成させた。倉庫完成と同時に私は駆けつけ、第二倉庫の訓練用の機械を無理やりに押し込ませた。私が先頭に立って、運搬を始め、押し込んだ。

他方チッタゴンの倉庫には小型のフォークリフトを一台日本から輸入して与えた。購入予算は私の指導しているセンターの予算から流用した。フォークリフトを知らない彼らは、「これは繊維プロジェクトになくてはならぬ、必要な繊維機械だ」の私の説明で納得した。（私の記憶では、このフォークリフトは東パキスタンの第一号である。その便利さを認めたのであろうか。その後間もなく WAPDA に大型品が五台輸入された）

セメントと、軽工業訓練用の機械を搬出して空になった第一倉庫、第二倉庫に、その後到着した繊維機械を納めさせた。「他のプロジェクトの機械は

野天に置いてよい。だが以後繊維機械は倉庫の屋根の下に入れること。そのために君達にフォークリフトを与えた。これは中島の厳命だぞ」

こうして翌年輸入された大小四百個に及ぶ梱包を雨期の雨から防いだ。

着任前になされていたCFC（Common Facility Center）に、繊維業サービスセンターを併設することが私の長官への直言で許可された。このサービスセンターの計画、機種撰定に私は預かることとなった。それで私は、官庁形式の言訳を残すために繊維試験機を少し揃え、残りはCFCの不足品及び製織、準備部門の機械を設置すること、その附属品をふんだんに揃えることに留意した。

それらの機械購入は国際入札によった。着任前のCFC用の購入機械も国際入札によるものであったからその欠点を現実に経験した私は、今回の入札に当たっては改良法を見い出せるようになっていた。いな改良法を見い出さねばならなかった。

入札、落札には私は直接タッチできない。私は間接の立場でタッチした。そして落札者が定まると、（落札には私は全然タッチできない）私は落札者とやり取りし、東パへの機械の到着日を知らせてもらい、且機械のカタログ、使用説明書等を私宛に直送させるのだった。これは、日、西ドイツ、イギリスの業者に要請した。

そして東パ入荷予定日頃になると、チッタゴンに飛んで行き、到着するや否や目的のセンターに発送させるのである。この場合国内輸送賃が業者によって高い、安いの問題があったが、私は契約方式を取らせ、（官庁はすべて入札でないと形式上不都合となることを知っていたが）一日も早く目的地に届くようにさせた。

「東パの温度、湿気、雨では、機械はすぐ発錆する。いまここに一千万円の機械がある。これの発送が三ヶ月遅れると機械は二十パーセント発錆する。

つまり二百万円のロスとなる。とするなら、今ここで輸送賃が二十万円、三十万円多くかかっても、二週以内に送る方が送らずにいて錆びさすより得になる。輸送業者に払う金は、例えそれがどんなに高くても、その金は廻り廻って何らかの方法でパキスタン国民間に使用される。送る手段が遅くなって機械の錆びたロスは再び帰らない、つまり国家の損失である。輸送者が高いと思っても、かまわない、〇〇業者に請負わせてすぐ送ってくれ」

（実際の運賃は十万～三十万円相当であった）

という風にして、錆びない機械が田舎のセンターに届くようになった。私は、光ったシャフトを見せ、「これが機械なのだ。錆び落としは不要だ。すぐ組立にかかろう」と皆の先頭に立った。現地人は目を皿のようにして喜び、私に従った。

かくして、私は錆び落としの手間を省き、機械組立、つまり建設の速度を早めて行った。

輸送機関の発達していない東パ内で、機械を地方のセンターまで送り込むのは容易でなかった。そのために輸送のための書類手続は煩雑となり、時月を要し、年数が経ち、機械は使用できなくなるケースが余りにも多かった。そのようにして動かなくなった機械を与えられて、それを運転するための技術指導を行うことはできない。反対に、必要とする機械、及び部品が使用できる状態でそれを必要としている現地に届く時は技術指導は容易である。それを行うには輸送をスムーズに行うことである。私の重点はしだいにそちらに向いて行った。技術指導の大半は、必要とする物を、必要とする場所に揃えることによって完了する。これは私に取って新しい貴重な体験であった。そして、沢山の予算が準備され、それに必要とする大金が準備されても、物がなくては作業はできない。例えば、一千万円の金を積んでも、そこに湯沸

かしに用いる容器がなければお湯を沸かすことはできないし、容器があっても、用いる燃料が入手できなくては目的は達せられない。物資不足のこの国では、指導に必要とする部品の入手はいくらお金を積んでもだめとなるケースが生じた。だから私は、必要とする物の入手には、銭、金を越えた考え方で進まざるを得なかった。つまりそれは、周囲の協力によるし、そのための工業、経済レベルの向上を根底とすることが必要とされた。そして工業、経済レベルの向上の機会を生み出すのが CFC の目的と考えた。そのように考えてその実現の源を考えて行くと、建設の重要性に戻るのだった。結言すると、工業、経済の無に等しい所に新しく工業を促すことは、無から有への創生であって、それは責任があるから工業を始めるとか、労力を有意義に使用するための方法とかいうものではなくて、全てを創生（create）するのである。これは私にとって貴重な体験である。かつて日本企業在籍時、和田野氏から言われた、工業技術の一般論、

g から kg への工業化は難しい

kg から t への工業化は尚難しい

t から百 t への工業化は別の道であるべきだ。

それに加えてここでの私の経験は０から t への工業化の難しさであった。